

地域母子保健福祉情報紙 No.280

公益社団法人 母子保健推進会議

親子保健

お や こ ほ け ん

定款第 1 章第 3 条 目的 (抜粋)
国及び地方自治体
関係諸団体と連携協力して
母子保健の重要性を啓発し
母性の健康を守り たかめ
心身ともに健全な児童の
出生と育成に寄与してまいります

妊娠期からの関わり、ボランティア的な活動の現状

日本財団助成
調査結果から



委員会で調査結果を検討 左から高橋睦子委員、今村晴彦委員、佐藤拓代委員長、福島富士子委員

本会議では、令和 4 年度事業の一環として、日本財団の助成により全国の市区町村母子保健担当課に、母子保健に係るボランティアな活動をされる方々の設置・活動状況と、母子保健の最近の現状・考えていること等について、調査票による調査を行った。その結果(データ)については本紙前号で報告したところだが、今号では、自由記載部分を中心に紹介する。回答(記入)者は、保健師が92.1%。

妊娠期からの関係性の構築重要

各自治体で日ごろ妊産婦や子育て中の方々と接する中で、妊娠期からの支援、関わり

の重要性を感じられることはあるかについて、自由に回答していただいた。

・妊娠期から顔の見える関係を丁寧に構築することで、その後の支援も介入のハードルが大きく下がります。また、妊娠期から支援者が寄り添って

ることを周知することで、予防的介入になると実感しています。

・妊娠期から保健師、栄養士が支援することで、信頼関係を築くことができる。相談相手(先)を明確にすることで相談につながりやすくなっていると感じる。

・妊娠期から、何か気になるな、心配だなと思う方や、母子手帳交付時のアンケートで気になる項目にチェックがついている方は、出産後の子育てでも支援が必要になることが多いと感じています。そのため、妊娠期から相談できる関係性を築いておくことが重要と思っています。

・子育て期に具体的に支援を必要とする方が多いので、妊娠期から地区担当が継続して関わる必要と感じます。

・出生数は減っていますが、妊娠期から支援を必要とする家庭は減っていません。児童虐待対策において、母子手帳交付をきっかけに、保健師が妊娠・出産・子育てに関する支援者として信頼関係を築くことは、家庭訪問で生活状況を把握し、健康問題や養育について介入することで、虐待予防の重要な役割を担っていると感じます。

・食事や生活リズムなど、妊娠期からの意識づけが産後につながると感じる。赤ちゃんが生まれてからは、常に自分のことを意識してもらうのは難しい。

・保健指導、食育、虐待予防、すべての入口は母子手帳交付時の面接となる。丁寧な面接により信頼関係を築き、健康および子育ての支援をしている。

・精神的に不安定なママや外国人のママなどは特に、妊娠期からの支援体制づくりが重要だと思います。

・妊娠期から関わっている、出産後も「いつも関わっている人」「知っている人」という安心感につながっているようだ。

・妊娠から出産・子育てに関するあらゆる相談にワンストップで対応することで、早期

アンケート

妊娠期からの関わり、ボランティア的な活動の現状 日本財団助成調査結果から… 1～5

紙上セミナー：8020の里づくり

「良い歯みがき、悪い歯みがき」～歯ブラシは楽しいのか嫌なことか～… 6～7

「8020の里賞」応募受付中です！／

「妊娠中から知っておきたい赤ちゃん和妈妈のこと」申し込み受付中！／編集帖 … 8

に適切なサポートができ安心して出産子育てができる。また子育てで包括・地区担当保健師と他の部署や関係機関が連携して支援を行う重要性を日々感じている。

- ・妊娠中に家族との関係性や育児協力者の有無等を把握し、出産後、虐待の可能性があるかどうか視野に入れた支援をすることができる。また、心理士による子育て相談が必要なケースかどうか知ることができる。
- ・妊娠期の関係づくりが、「受援力」にも影響していると感じます、
- ・自分の思い描く育児ができない、そんな自分を否定する母親を多く見かけます。妊娠期より育児を期待できる支援の必要性を感じています。

最近の傾向ーネット情報の過信

SNS、コロナ、予期しない妊娠…

- ・メンタルの問題があったり、育児環境が不安定(シングル等)で、支援が必要なケースが増えてきていると感じる。
- ・初回によい印象を与えること(良くも悪くもSNSに書かれることがあります)。ネットなどに子育ての情報が溢れているため、プラスの情報と正しい情報を伝えられるかも重要だと思います(保健師が伝えた情報をネットで確認する方が増えた)。
- ・ネット社会で多くの情報が氾濫し、不安を増長させるなど、情報に敏感過ぎる妊産婦が多いと感じます。
- ・子育ての準備や対応力(自ら情報を収集し、考え、決定、実行する)が低下しているように感じる。
- ・転入の初産婦が、新生児のいる生活がイメージできないという言葉をよく聞きます。コロナにより、母親学級を受けられない方もあり、不安を取り除く支援が必要と思われる。

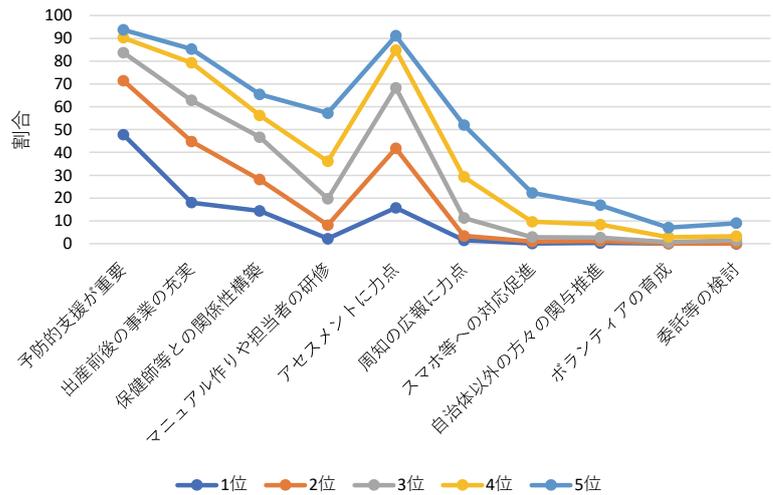


図1 母子保健事業で重要と考えていること (1位から5位の積み重ね)

- ・育児の具体的なイメージが持てないまま出産を迎えるケースもあり、出産前から、子どもを育てるにあたっての支援が必要と感じています。
- ・精神疾患を持つ妊婦、予期しない妊娠、新型コロナウイルスに感染した妊婦等精神的にハイリスクな妊婦が増えていると感じる。
- ・予期しない妊娠など、妊娠を喜ばない妊婦もいるので、その方たちへの対応は重要だと感じる。出産までや出産後の子育て期間を安心して過ごせるように支援していく必要があると感じる。
- ・特に若年の妊婦は、妊娠期からの信頼関係の構築が重要と考えており、アプローチの手段について、さらに考える必要があると思っています。
- ・発達に課題のある児について、愛着問題が下地にある例が増えている。
- ・妊娠中にアセスメントをした結果、出産前から支援をしていたにもかかわらず、虐待や貧困等となってしまう場合があります。保健師にしかわからない生活上の問題点多々ありますが、保健師のみでは解決できないが増えてきていると感じます。
- ・コロナ禍で、病院の両親学級が行われず、立ち合い出産や面会も不可となり、妊産婦

- さんは情報不足、孤独感を増大させていた。自治体が支えていく必要性を感じている。
- ・コロナ禍でオンラインの利便性が注目されるが、妊娠・出産・子育てと人生最大のイベントを体験する母子を支えるには“対面”が非常に大事であると再認識している。
- ・直接対人支援を減らさず母子と直接関わることで、信頼関係を築くことの関係性を築くことの大切さを感じている。
- ・妊娠届の提出時期が遅くなっている。その理由として、妊娠に気づけなかったという人が増えている。思春期を含めた若年層へのアプローチの必要性を感じる。
- ・特に特定妊婦のケースで、妊娠初期にしっかりアセスメントを行い、ボランティアとの強い連携のもと支援を行うことができ、虐待予防にもつながる。
- ・未婚やステップファミリー等多様な家族形態での妊娠・出産が増えてきており、その方の背景や考え方を理解し、寄り添っていくことが必要だと思う。

地域の実情に合わせた工夫も

- ・出産直後からストレスや負担の多い生活が始まるので、妊娠期から関係性をつくっておかないと、頼りたいと思ってもらえない

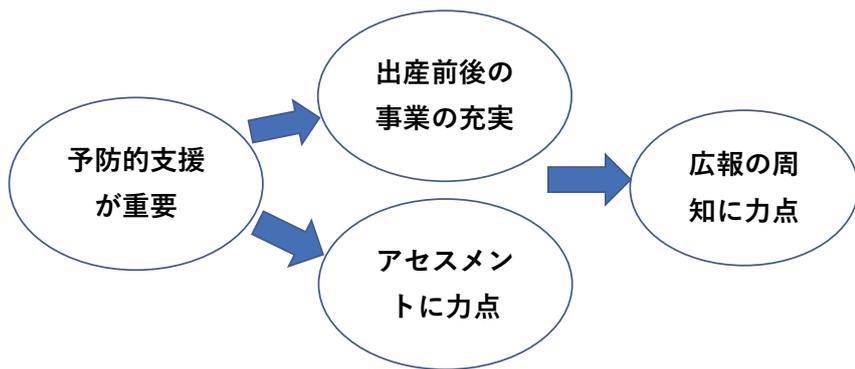


図2 母子保健事業で重要と考えていることのプロセス

と思う。そのため、妊娠期から顔を合わせる機会を、母子手帳交付以外にもつくる等工夫している。

- ・母子手帳交付時に、全妊婦に面接して支援プランを作成しているため、保健師と次に関わる機会を予告することで、連絡時の受け入れがスムーズになった。
- ・全妊婦に支援プラン(セルフプラン)の策定、相談窓口の紹介、必要に応じ体調確認等を行うことで、産後の困りごとへの関わりが早急に行えると考えています。
- ・対面で話ができる状況を積極的に設定し、困る前に“その後どうですか？”と近況が聞ける関係になっていることが大切だと思う。
- ・妊娠届時にリスクアセスメントを行い、必要な方に医療機関と情報共有しながら、産後の子育てで想定される課題に対応できるよう支援することが大切。
- ・妊娠34週に全戸訪問しています。生活困

窮やDV、産後うつ等の早期発見・介入につながっていると感じています。

- ・平成30年から母子手帳交付時の面接を全員に行うようにした。妊娠期から関わることで、健康面だけでなく、家族背景や生活状況を把握することができ、必要な情報提供、支援を早期から行うことができるようになったと実感しています。
- ・妊娠中に1人につき3～4回お会いする機会があるので、出産後すぐ病院から電話をいただくなど、関係性ができている分、支援しやすいと感じている。
- ・母子保健と要対協を一つにした組織と医療機関(産婦人科・小児科)と月に1回Webで会議を行っており、予防的支援につながっていると感じている。
- ・離島のため人数が少なく、妊娠・出産・産後まで、かなり濃厚に関わられている。
- ・妊娠中から不安が強い母を把握し産後ケア

事業を紹介するなど産後の支援が確保できると、安心して妊娠期を過ごし、出産を迎えられるよう支援している。

- ・当市では、My助産師による産前・産後の継続ケアを実施しています。お母さんが持つ力を引き出し、自分らしい妊娠・出産を体験し、その後の豊かな子育てへつなげることができるよう、関わっています。

対象者の背景、地域性からの課題

- ・自治体により医療機関、専門機関、ボランティアなどの資源に差があり、自治体の母子保健担当に責任がのしかかっているのが現状です。
- ・妊産婦の背景も複雑さを増し、それに伴い支援機関も多岐にわたるため、連携の重要性を実感しています。
- ・情報化社会の中で、適切な情報を選択できなかったり、余計に不安になる方も多く、気軽に相談できる体制が必要だと感じる。
- ・切れ目のない支援と自立支援のバランスが難しいと感じています。
- ・マンツーマンの人間関係の構築が大切。信頼してもらえ、本音が聞けるかもしれない。本当に必要な支援が見つかるかもしれない。
- ・妊娠期からの関わり的重要性は常に感じるが、資源や人員、業務量により、十分な支

- ・ 援ができていないと感じる。
- ・ 妊娠期にもう少し予防的な関わりができていると、産後うつ等も減少するのではと、保護者の訴えを聞いて感じている。
- ・ 本町は出生数が少ないので、関係性の構築は容易だが、一方で、産科医療機関がないなど必要なサービス資源がないなかで、どう支援していくかが課題。
- ・ 小さな村のため、支援者と対象者が近所に住んでいるため、把握は容易だが、支援がしづらいことが多い。
- ・ 小さい自治体のため、必然的に妊娠期からずっと同じ者が担当することがあり、そのメリットは大きいと感じるが、専任にする余裕や上司の理解がない。
- ・ 保健師の配置が町の中心部に集約したため、情報があまり入って来ず、細部に目を配ることが難しくなった。
- ・ 特定妊婦の方の背景がとても複雑、多問題の方が増えており、既存の制度、サービスでは対応が難しくなっている。外国人の場合などに在留資格の問題や経済面など、母子保健だけでは解決が難しい。また、妊娠出産に対する考え方も多様化しており、さらに、不妊治療など専門知識を有する専門的な相談の場が必要である。
- ・ 個人や家族の持つ健康課題には連鎖があるように感じます。人生の基礎となる時期から予防的視点での関わりが大切だと思います。
- ・ 乳幼児に接したことのある大人が少なく、子育ての基本から教えなければならないことが多くなっている。子どもの事故について親の危険認知意識が低いと感じる。
- ・ 行政サービスを知る手段が、本人の努力に拠るところが大きいため、自動的に各サービスにつながるとよいと思う。人とのつながりに左右されるサービスだと、公平性に欠けるのではと思う。

- ・ 経済的な余裕なく妊娠される方が多く、ケースワーク的なことも必要。外国人の方も多く雇用の不安定さから住所が定まらないなど課題も幅広い。妊娠期からの継続支援が大切だと感じている。
- ・ 妊娠期からの支援の効果は、関わった児が大人になるのを待ってから評価すべきではと考えている。

予防的支援のためのアセスメントと… 母子保健事業で重要と考えること

今般の調査では、「母子保健事業を実施するにあたり、何を重要と考えているか」についても聞いている。下記10項目のうち、各自治体で重要と考えている順に1位から5位までを挙げていただいた。

- ①予防的支援が重要、②出産前後の事業の充実、③保健師等との関係性構築、④マニュアルづくりや関係者の研修、⑤アセスメントに力点、⑥周知の広報に力点、⑦スマホ等への対応促進、⑧自治体以外の方々の関与推進、⑨ボランティアの育成、⑩委託等の検討。

1位に挙げられたうちもっとも多かったのが「予防的支援が重要」、次いで「出産前後の事業の充実」であった。2位に挙げられたうちもっとも多かったのは「出産前後の事業の充実」、次いで「アセスメントに力点」、3位ではもっとも多かったのは「アセスメントに力点」であった。

1位から5位までを積み上げた割合を図1に示した。ピークが2つあり、「予防的支援が重要」と「アセスメントに力点」であった。予防的支援が重要であるが、手段として、ケース像の理解にはアセスメントに重きを置くことが重要と考えていた。

以上の結果から、考え方のプロセスは、図2のように考えられた。理念である「予防的支援が重要」から具体的内容である「出産前

後の事業の充実」「アセスメントに力点」が重要であると考え、次いで「広報周知に力点」が必要と考えていることが推測された。

人材不足、高齢化、予算・養成のマンパワーがない…

次に、ボランティア的に活動する方々についての自由記載について紹介する。

- ・ 人口規模が小さく、さらに減少しているため、地域の組織活動自体が衰退化しているため、難しさを感じる。
- ・ 地域の社会資源として利用できる場所は利用したいが、予算的な部分を要求されると、難しいと感じる。
- ・ 担い手が少ない。担い手が高齢。
- ・ ボランティアが立ち上がっても新しい方が入らず、高齢化して活動の継続が難しい。
- ・ 母子保健事業への同行、同席から介入したいとの申し出があるが、母子の抱える課題が複雑化しており、従事専門職としても慎重かつ時間をかけて関係性の構築を試みているので、協働できる機会を持ちにくい現状がある。
- ・ 子育て支援に関心がある方はいるが、自主的に企画をしたり、活動の場を開拓していくことにはハードルが高いようで、バックアップが必要だと感じる。しかし庁内にその役割を担う部署が定まっておらず、調整や連携を行っている状態。
- ・ 新たな人材を確保できない地区がある。現在活動している方には、負担にならない程度の活動量をお願いしている。
- ・ ボランティアをしたいという声は聞かぬが、実践には至らない。保健師の事務作業量が多く、育成、運営まで手が回らない。
- ・ 子育て世代は就労者が多く、60代以降は親の介護がある方も多く、後任が見つからないのが現状です。

- ・今のマンパワーでは養成は困難。
- ・ポピュレーションアプローチとして積極的に関わっていただくことは重要と思うが、成育歴の厳しい方など対応に苦慮する場合は、関係機関に相談していただけたらと考えている。

ありがたいが難しさもあり

- ・協力いただくことはありがたいが、反面、どこまで負担をおかしてよいか悩む。
- ・自治体としてもっと連携したいと思う反面、ボランティア活動にどこまで求めてよいか迷いがあり、積極的に関わっていない。
- ・個人情報の守秘義務について、どこまでわかってくるか、守ってくださるか。安全を考えるあまり、活動の内容に制限がかかったり責任の所在がわからなくなること。
- ・ボランティアの立ち位置を活動する方々で統一するのは難しいと感じます。一人ひとりの意識の違い、受身的か能動的かなど。
- ・大変ありがたい存在だが、対象者と連絡をとったり、初めて会う時など気苦労が大きいのだろうと思う。非専門職には、なかなか重たい活動だと思う。
- ・昔のような近所づきあいが希薄になる中で、訪問や声掛けの方法に留意する必要があり、価値観の違いから、意思共有に大変さを感じることもある。
- ・ボランティア組織ができれば、保護者のゆとりにつながり、虐待予防の一助になると思いますが、人口の少ない当町では、人材確保が困難です。広域的な取組があればよいと思います。

なくてはならない存在！

- ・行政では手の届かない部分を支えてくれる（気づいてくれる）パートナー的な存在です。育成は難しく感じる場所もあります

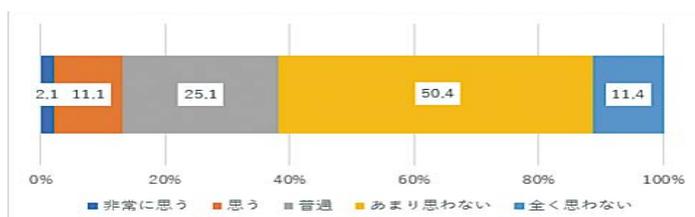
- ・が、力を引き出すことができると、お互いやる気が上がり、とても効果的だと思います。
- ・地域で生活されているため、日常生活を送る中で気づいた変化等を共有していただき、行政では気づきにくい部分を助けていただける、大変ありがたい存在です。
- ・地域共生の先駆者。
- ・奉仕の気持ちが強いことに頭が下がります。まずは楽しんで活動していただけるよう、行政として環境や体制の整備ができればと日々思っております。
- ・行政と住民の方の橋渡し役として、地域で生活をするボランティアだからこそその町民の方への声掛けなど、町民の健康増進のために活躍していただいている。
- ・事業を一部委託し、行政だけでは担いきれない部分を手厚く実施できている。情報共有を随時行うことで、支援が必要な母子を把握し、必要なサポートを行うことができていると考えている。
- ・本市では、活動に積極的で、様々なアイデアを出しながら、他のメンバーと協力して活動される方が多くいらっしゃいます。
- ・行政と共に、地域での子育て、親育てを支えてくださることは、地域の強みであると思っています。

- ・地域の身近な相談相手として、地域の見守り役、サポート役になってくださっている。行政とのパイプ役として、気になったことを情報提供くださり助かっている。また、保護者に対して、こどもとの関り方、遊び方を教えてくださっている。
- ・ボランティアの方々の地域への想いを行政がサポート（相談を受け助言、予算の確保等）することや、双方の信頼関係づくりも重要と考えています。
- ・地域での見守り、必要時には保健師につないでくださり、感謝している。そのためにも、研修によるスキルアップが大切である。
- ・とてもありがたいです。地域を活性化していただける貴重な人材です。
- ・生活圏内で活動しているため、地域の変化に敏感。情報をたくさん持っている。住民目線で母子保健事業への意見をいただける。感染症流行時でも、訪問の大切さを認識され、訪問されていた。
- ・妊産婦や子育て家庭の身近な支援者であるとともに、活動を通じて、双方（対象者もボランティアも）エンパワメントされる。とても重要な組織だと思います。
- ・母子保健活動をする上で、なくてはならない存在だと思う。

お詫びと訂正

本紙前号（No.279）で紹介しました、日本財団助成により実施した調査の結果に誤りがありました。前号4ページに記載の「子育て支援に注力で母子保健が疎かになっていると感じることはおありでしょう

か」の問いの結果は（不明除く）、「非常に思う」14件（2.1%）、「思う」75件（11.1%）、「普通」170件（25.1%）、「あまり思わない」341件（50.4%）、「全く思わない」77件（11.4%）、「不明」16件でした。お詫びして訂正いたします。



紙上セミナー
SEMILAR

8020の星づくり

「良い歯みがき、悪い歯みがき」 ～歯ブラシは楽しいのか嫌なことか～

前回は、新生児からのお口のお掃除、歯みがきを出来るだけ嫌がらず、無理なく進めるためのポイントなどをお話ししました。今回はお子さんの食生活の変遷に伴ったお口のケアやお食事についてお話しします。また歯ブラシと歯磨剤の選択のポイントについてもお話しておきたいと思います。

子どもの頃に獲得した食べることに必要な噛み方、舌の動き、飲み込むといった口腔機能は、その後の歯みがき習慣や適切な食習慣とともに成長期だけではなく高齢者になってまで影響してきていることが分かってきています。まさに「三つ子の魂百まで」なのです。親として目の届くうちはお子さんの成長に合わせた食生活やお口のケアに努めてみて下さい。

食事に一品

お子さんの食事は、母乳、ミルクから離乳食などを経て常食に変遷していきます。

歯がなく液体状の食事の時期は、ミルクなどの汚れが気になるころだと思えますが、これは乳幼児の時期に起こる吸啜反射により自然にこそげ落ちてしまいます。汚れ以外で気にする方が多い点としてミルクなどを飲んだ後の口臭があります。しかしこれは食物臭です。大人のように歯周病やむし歯で匂っている訳ではないのであまり気にされなくて良いでしょう。この時期はガーゼなどで口周り

や舌を軽く拭いてあげて下さい。

さて月齢が進むとともに、離乳食「ペースト状のもの」、「きざみ」、「常食」へと食形

態は多様化していきますが、口の中も歯が次々と生えてきて、その様相も複雑化していきます。歯みがきのいよいよ本番です。

生えたとの歯はまだ摩耗していないので噛み合わせ面の溝も深く、汚れが残り易い形態をしており、要注意箇所となります。また歯の付け根(歯ぐきとの境目)や歯と歯の間も汚れが溜まり、むし歯の好発部位になります。この三つのポイントに歯ブラシの先端を当てるように心がけましょう。親御さんの仕上げみがき、チェックは出来れば学童期まではしてもらいたいところです。

食事の多様化の中で、食物の形状もお口の清掃に大きく関わってきます。

野菜の繊維は噛む度に歯の表面を上下し、付着した汚れを落としてくれますが、身をほぐした時、繊維状になる肉類、例えば魚の干物、鶏のささ身肉などでも同様の効果が望めます。調理法によっては牛や豚でも良いでしょう。

よく噛まないで飲み込みにくいものを一品混ぜることで、噛む回数が増え、食物が歯の表面を行き来する回数が増え、清掃機会が増えます。また、それに伴い唾液の分泌が促され、消化を助けると同時に口の中を洗い流す自浄作用が高まります。

噛むことがお口の清掃に繋がることを書きましたが、噛むことで、顎の骨や口の周りの筋肉の発達も促されます。顎がしっかり発達すると大人の歯が生えるスペースも確保され易くなるので、歯並びにも良い影響を及ぼしてくれるでしょう。

「よく噛んで食べようね。アムアムアム」と噛ませて、顎を使わせて下さい。

最近の食事のメニューを見てみるとカレーライス、ラーメン、ハンバーグ、パンなど、食べているうちに粘稠性をもつものが主役となっています。これらは食べた後、歯の表面や、歯と歯の間に粘るように張り付いて取れにくくなってしまいます。この時、野菜サラダやホウレンソウのお浸しを添えたり、キュウリの漬物や沢庵、きんぴらごぼう、鰯の干物などを一品つけると前述のような効果を発揮しますので、食後の歯みがきを助けてくれることとなります。

テレビでは美味しいものを食べた時の表現として「やわらかくて美味しい」、「歯がいらなくらいですね」とか、あげく



に「カレーは飲み物」と言っていますが、如何なものでしょうか。歯科医や食育に携わる医療人の立場から言えば「放送禁止用語」級の不適切発言なのです。

歯ブラシ

薬局やホームセンターの歯ブラシコーナーに行くと大小様々な歯ブラシが陳列してあり、どれを選んだら良いか迷ってしまいます。お子さん用だけでも0歳児から5～6歳児はメーカーにより指定年齢の区分が違っていたり、ブラシのサイズや硬さ、柄の形状の違いなど様々です。中には電動歯ブラシもありますが、お子

さん用の場合は従来の自分でみがく手用歯ブラシを使って下さい。ひとつひとつ丁寧にみがく癖をつけるのにはこちらのほうが適しています。

メーカーによって区分は多少の違いがありますが大体「母親みがき用(仕上げみがき：0～6歳)」「乳幼児用(0～2歳)(3～5歳)(0～6歳)」「混合歯列前期用(5歳～9歳)」「混合歯列後期用(8～12歳)」のように分けています。

中学生、高校生でまだ顎が成長過程であれば、「ヤング」や「スリム」といった一般向けの中では少し小さめのものが良いでしょう。

歯みがきペースト(歯磨剤)

乳幼児では歯みがきペーストは使わず、歯ブラシの先を水で湿らせてあげるだけで良いでしょう。3、4歳になって自分でうがい出来るようになってから歯みがきペーストを使うようにしましょう。その際にはフッ化物含有の小児用が良いでしょう。歯質の強化や再石灰化を促す効果が期待できます。選ぶ際には国産の大手メーカーのものを目安とすれば良いでしょう。

公益社団法人 日本歯科医師会

地域保健委員会委員 蛭名 勝之

8020 ひとくちメモ

小さい歯ブラシ・大きい歯ブラシ

歯ブラシは、薬局や量販店に行くと様々なものが販売されています。

歯ブラシでお口の中を隅々まで綺麗にみがこうとすると、狭い空間を舌や頬に邪魔されないようにするためには、小ぶりなもののほうが操作性が高く、お口の中の違和感は少なくなります。実際、多くの歯科医の推奨する考え方だと思います。最近発売された歯ブラシも植毛部の土台を薄くし、ブラ

シの厚みを減らすことで奥歯などをみがく際の操作性を向上させたものが新商品として出ています。

一方で植毛部の面積を広げた大きな歯ブラシも出ています。これは、「近年むし歯が少なくなってきたのは食後の歯みがきが定着したというより、歯みがき剤に含まれるフッ化物が、お口の中に残留することの影響によるもの」という考えによるものです。残念ながら歯みがきに要する時間

は未だ短いため、歯をみがく道具というだけではなく、短時間で少しでも多くのフッ化物をお口に届ける道具として使用するためにブラシ部分を大きくしてあります。

お口は人が生きていくために必要な栄養源を摂取する入口です。歯ブラシはその場所を清潔に保つ、大切な道具です。小さくても、大きくても、ご自身のお口の環境にあったものを選んでください。

健診会場等でご活用ください ～歯科保健指導用パネルのご紹介～

歯科保健指導用パネルは、公益社団法人 日本歯科医師会の指導・監修のもと作成しました。歯科保健指導用パネル2枚分の内容をA4判表裏に印刷したヘルシートも好評です。価格は税別で、パネル1枚13,000円(各セット価格あり)、ヘルシート1枚20円(100枚単位)。総額15,000円未満は送料がかかります。

【歯科からの食育とむし歯予防シリーズ】

- ①妊娠期 マイナス1歳からの口腔ケア
- ②離乳期 お口の発達と食育支援(右写真)
- ③幼児期 楽しく食べる子に育てよう
- ④学齢期 お口の健康と生活習慣
- ⑤むし歯のなりたち
- ⑥子どものむし歯予防
- ⑦フッ化物でむし歯予防

他のシリーズもありますのでお問い合わせください



あなたの“まち”の活動を応募してみませんか？「8020の里賞」応募受付中です！



「健やか親子21全国大会」会場ロビーでの展示

本会議では、口腔をはじめとする乳幼児期からの健康づくりの重要性の啓発と、地域における組織的な活動の活性化を目的に、平成21年度より「健やか親子21—8020の里賞（ロッセ賞）」を行っています（主

催：本会議、後援：公社）日本歯科医師会・公社）日本歯科衛生士会）。健診の待ち時間や保育園での寸劇や紙芝居の上演、手づくり教材の制作など、日頃地域で行っている活動をご応募ください。優秀賞受賞団体には、「健やか親子21全国大会」の会場にて、表彰状の授与のほか活動展示を行っていたいており、全国から集まる同様の活動をする方々とのアイデア交換の場としても好評です。むし歯予防のほか、食育や家庭内のこどもの事故予防など、幼児の健康づくりに関する活動を、ぜひご応募ください。

【審査基準】

- (1)地域の課題やニーズを汲んだテーマの活動であり、より多くの対象者に啓発することに努めていること。
 - (2)行政、専門職、関係機関との連携が密であり、活動の発展が期待できること。
 - (3)複合的な取組、または活動(制作物含む)に創意工夫があること。
 - (4)地元の特産、特徴を取り入れるなど、地域の活性化や新たな連携の構築につながっていること。
- 自治体の皆さまには、実施要領等同封しています。ご応募をお待ちしております。

日本宝くし
協会助成

「妊娠中から知っておきたい赤ちゃん和妈妈のこと」申し込み受付中です！



毎年ご好評をいただいています、母子健康手帳交付時等に妊婦さんに手渡す冊子「妊娠中から知っておきたい赤ちゃん和妈妈のこと」の令和5年度版ができてまいりました。妊娠中から産後しばらくの頃、事前に知っておくと気持ちが楽になる、なるほどと納得するような内容を、やさしいイラストとともに解説しています。

A5判15ページ、送料含め本会議負担でお送りしていますので、ご希望の冊数、送り先などを、本会議サイトからエクセルの表をダウンロードしてお申込みください。<http://www.bosui.or.jp>
内容例 赤ちゃんの育ちを支えて/ママのからだも激変期/赤ちゃんはなぜ泣くの/こどもの育ちをみんなでサポート等

編集帖



今号では、日本財団の助成により実施した調査結果から、全国市区町村の母子保健担当者からの回答のうち、自由記載について紹介した。前段では、市区町村で行われている母子保健事業について、後段では、母子保健推進員等地域で行政と協力しボランティアに活動する方々に対する考え方についての回答である。

市区町村で行われている母子保健事業について「子育て支援に力点をおくため母子保健事業が疎かになっていると感

じることがあるか」の問いに、「非常に思う」「思う」を合わせると13.2%の市区町村が「感じている」と回答した。約7.5市区町村に1か所、1都道府県に数市区町村以上が「母子保健が疎かになっていると感じている」と回答していることになる。家庭訪問すべきところ電話で済ませざるを得ないなどの記載も見られた。家庭を訪問するからこそその情報、その後の対応が変わる可能性もあり、親子に影響しないことを願うばかりだ。(Y)

発行：公益社団法人 母子保健推進会議
発行人：原澤 勇 編集人：鎌溝和子
協力：全国母子保健推進員等連絡協議会

東京都新宿区市谷田町 1-10
保健会館新館 (〒162-0843)
TEL.03-3267-0690 FAX.03-3267-0630
Eメール bosui@bosui.or.jp
URL <http://www.bosui.or.jp>

年間購読料 2,640 円 (税別込み)
母子保健推進員等特別価格
年間購読料 1,320 円 (税別込み)
郵便振替口座 00120-9-612578